サラエボ 1992-1995

ぼくたちは戦場で育った

ヤスミンコ・ハリロビッチ・編著
角田光代・訳
千田善・監修

集英社インターナショナル　ウェブ立ち読み

日本語版序文

ヤスミンコ・ハリロビッチ

ボスニア・ヘルツェゴビナはヨーロッパにある小さな国です。

この本には、ぼくの国で起きた戦争と、その中ですごした子ども時代のことが書かれています。当時はぼく自身も子どもでした。戦争はぼくのまわりのものすべてを破壊しました――ぼくのアパート、遊び場、ぼくの住んでいた通り、グラウンドや体育館、図書館、病院、そしてぼくの学校など全部です。ぼくの学校やほかの多くの建物を建て直すのに日本が援助してくれました。

子どもたちは学校で日本について習いますが、最初におぼえるのはその国旗です。ほかの国々とくらべて、日の丸はとてもおぼえやすい。そして次に日本とは「日出づる国」という意味だと習いました。ぼくは小さな子どもの時に、こういうふうに日本のことと、日本がぼくたちの学校を直すのを助けてくれたことを習ったわけです。

この本のボスニア語版が出版された時、サラエボの日本大使館の人が連絡してきました。「今、サラエボに日本のテレビ局の取材班が来ていて、ボスニアについてのドキュメンタリー番組を撮影しているのだが、取材班のディレクターがこの本のことを知り、興味を持っている、できたら会って話をしたい」というのです。

これがきっかけになり、ボスニア・ヘルツェゴビナ以外では日本が、本書を出版する最初の国のひとつになったのです。

その番組（NHK-BS「旅のチカラ『街は毎日が銃撃戦～角田光代 ボスニア～』」）の撮影で、ぼくは日本の小説家である角田光代さんと話をしました。この本が日本で出版されることになったのは、なによりも角田さんのおかげで、ぼくは感謝してもしきれません。

また、ボスニアと日本の両方で有名なイビツァ・オシム氏が文章を寄

せてくださったことにも、とても感謝しています。さらに、ぼくの友人の千田善氏は日本人でありながら半分ボスニア人みたいな人ですが、この本を日本で出版するにあたって手助けをしてくれたことにも感謝しています。

また、日本での翻訳著作権を仲介したタトル・モリ エイジェンシーと、出版元の集英社インターナショナルのみなさんのプロフェッショナルな協力にも感謝いたします。

日本は国民の大多数が平和を望んでいる国として知られています。だからきっと、日本の読者のみなさんはこの本から反戦のメッセージを読み取ってくれるでしょう。メッセージはこの本の各ページの言葉の一つひとつにこめられています。戦争中の苦しみや恐怖、痛み、悪夢について綴られていますが、それだけではなく、愛や美など人間がそなえている、最も良いものについても書かれています。

ボスニア・ヘルツェゴビナのような小さな国から見ると、日本のような大きくて強力な国に友人がいることは心強いです。これからは両国の友好関係の歴史に、もっと光にあふれた明るい章を書いていきたい。それは戦争や災害で壊されたものを復旧するだけでなく、文化的交流や平和のための共同のたたかいの時代がやってくると信じるからです。平和への強い願いは日本人とボスニア人に共通していますし、平和へのたたかいは国の大きさにかかわらず協力しながら、そして固い決意で取り組んでゆくべきものだとぼくは思っています。

ぼくがこの文章を書いている最中も、世界のどこかで戦争が起こっていて、その中で子どもたちが暮らしています。もちろん、この本に戦争を止める力なんてない。でも、この本に書かれた体験を知ってもらうことは、平和を願う声を世界中に広めていくために意味があるとぼくは信じています。

サラエボの子どもたちのメッセージを聞いてください。ひとりの子どもも戦争の中で暮らさないですむような、そんな世界のために。

訳者まえがき

角田光代

2013年、テレビの仕事でサラエボを訪れた。きっかけは、1冊のガイドブックだ。たまたま手にとった『サラエボ旅行案内――史上初の戦場都市ガイド』(三修社　著・FAMA 訳・P3 art and enviroment)というタイトルの本は、まさに戦時下のサラエボの町を紹介している。驚くのは、町が戦場となっていることだ。ふつうの人々が暮らす町が敵に包囲され、ふつうの人々が標的にされる。それはあたかも渋谷や新宿が封鎖され、通行人や買い物客が狙われているようなものだ。それなのに、町や暮らしを紹介する文章はアイロニカルで、ユーモアに満ちている。攻撃にさらされている町で、コンサートも演劇もサッカーの試合も催されていると書いてある。

なんなんだろう、この町は。そう思った。戦争は20年近く前に終わっているが、その町を見たい、その町に暮らす人々に会ってみたい。そう思って出向いたのである。いろんな人に会った。件(くだん)のガイドブックを企画した女性、コンサートを開き続けたバイオリニスト、戦争で子どもを失った母親たち、当時子どもだった女の子。本書を編集したヤスミンコくんにもそのときに会った。

まだ20代のヤスミンコくんは、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争と呼ばれる戦争が続いた、1992年から1995年に子どもだった人たちにインターネットで呼びかけた。「あなたにとって戦争ってなんだった？」と。彼自身、戦争開始時には4歳だった。

戦争が終わったとき、子どもだった彼はさみしそうだったと両親に言われたそうだ。それまで数えていた砲撃音がしなくなったから。つまり、彼ら子どもたちは砲撃音の音を数えたり、弾丸を集めたりして、たのしみを見出していたのだ。そうだよな、子どもは何が起きているかわ

からないものな、と私が思った次の瞬間、彼は言った。ああした異常な世界では「ユーモアが生きる術(すべ)になる」と。そうか、と思った。子どもはわからないのではない、言葉にならずとも本能的に知っている。遊ぶことで、笑うことで、たのしいと感じることで、子どもたちは闘っていたのだ。包囲され、砲弾が飛び交い、爆発が起き、ライフラインが切断されたなかで、そんなことにはぜったいに屈しないのだという意志を持って、子どもたちはたのしみをさがし続けたのだ。私は思ったそのことをヤスミンコくんに言ってみた。そうですね、と彼は言った。ふつうに暮らすことが抵抗だったのです。

サラエボの町をぐるりと取り囲む丘や山を敵は占拠し、通りを歩く一般人を銃で撃った。人々はそんな状況のなか、コンサートにいき、サッカーにいき、演劇を見にいった。それもまた、日常生活を奪われた人々の闘いだったのだ。

サラエボの人たちはライフラインを止められ、食料は人道支援団体から送られる「ランチパック」が主なものになった。本書にもあるとおり、子どもたちはいつでもおなかをすかせ、チョコレートを夢見ている。でも私はサラエボの人たちとヤスミンコくんに話を聞いていて思ったのだ。食べものは生命を維持する。でも、「いのち」を維持するのは、音楽だったり映画だったり芝居だったり本だったりスポーツだったり、会話だったり笑いだったり、目には見えない希望だったりするのではないか。そういうものがなくては、生命は生きても「いのち」は削り取られていくのではないか。私は、何か重大なことが起きるたび「自粛」を呼びかける、自分の住む国を思った。うたうことも笑うことも冗談を言うことも自粛され、自粛しないと白い目で見られ、ときに市井の人々からも総攻撃を食らう私たちが、もしこうした異常事態のなかにあったら、「いのち」をどう生きながらえさせることができるのだろう。

対話の終わりに、この本はぼくの反戦の意志ですとヤスミンコくんは言った。この本を日本で紹介できないだろうかとそのとき思った。ふ

つうではない日常のなかで、懸命にふつうを守った人たちの言葉を届けられないだろうか。

私が見つけたガイドブックを企画した女性が言っていた。「多くの人は、自分の身に悪いことが起こるなんて思っていない」。戦争は、ある日突然やってくる。それが本当にやってくるまで私たちは気づかない。はじまったときも、「すぐ終わる」と思っている。「これ以上悪くなることはないはず」と思っている。そうして彼らは4年間も、戦争という異常事態のなかで暮らすことを強いられたのだ。私はそれを聞いてぞっとした。知らないうちに巻きこまれているという状況が、現実味を持って想像できたからだ。

ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争はものすごく複雑だし、町が包囲されて攻撃されるという異常な事態を理解するのもたやすいことではない。けれどここに集められたかつての子どもたちの声は、ひどくシンプルだ。戦争とは何か。大義でもなく解釈でもなく、じつに単純に子どもたちは言い当てている。

2015年9月9日

ユーゴスラビア紛争について
——なぜ戦争になったのか

千田善

20万人近くが殺された

ボスニア・ヘルツェゴビナをふくむ旧ユーゴスラビアは、かつては多くの民族が共存する連邦国家だったが、現在では7つの独立国にわかれている(①セルビア②クロアチア③スロベニア④ボスニア・ヘルツェゴビナ⑤マケドニア⑥モンテネグロ⑦コソボ)。

国が独立したり分裂することはめずらしくない。ソ連(1991年にロシア、ウクライナなど15の共和国に分裂)やチェコスロバキア(1993年にチェコとスロバキアに分裂)などの例がある。

しかし、旧ユーゴスラビアの場合は不幸なことに、話し合いではなく戦争になった。そこでは10数万〜 20万人が殺され、400万人以上が故郷を追われた。1918年に王国として建国されたユーゴスラビアは、社会主義時代を経て、70年あまりで解体した。*

民族主義から戦争に

いったいどうして戦争になってしまったのか。

かんたんに言えば、各国の政治家たちが選挙に勝つために民族主義に走ったためだ。

ユーゴスラビアは6共和国2自治州の連邦国家で、チトー大統領の時代には各民族の平等と友好が大切にされた。しかしチトーが1980年に死んだ後、深刻な経済危機におちいった。

1990年の自由選挙の際、当時は「経済を建て直します」なんて演説しても、誰も信じる状況ではなかった。そこで、わかりやすい政策として民族主義(我が民族のためにがんばります、自分たちが貧乏なのはあいつら

のせいです)が公約になった。

その結果、すべての共和国で民族主義派が与党になり、連邦議会や中央政府はマヒしてしまった。そのうち「もうこんな国とはおさらばだ」と一部で独立運動もはじまった。

自分たちこそが正しい(あるいは被害者だ)と、テレビや新聞で毎日そうした宣伝を聞かされ(読まされ)ているうちに、だんだん「自分たちは強く、相手の民族や国は弱い」という気にさせられる。「戦争はしたくないな」と思っていた人も、影響されて「短期間で勝てるなら」と賛成するようになる。こうなると、行き着く先は戦争だ。

じっさいのところ、政治家たちは、最初から戦争を考えていたのではないだろう。しかし、本当に戦争になりそうなときに「ちょっと待て、ここは話し合おう」などと態度を変えると、次の選挙で勝てなくなるし、過激派に暗殺されるかもしれない。

国連があいだに立った和平交渉など、戦争を避ける(または途中でやめる)チャンスは何度もあったが、「戦争はやめよう」と言い出す勇気のある政治家がいなかった。

領土分割戦争と民族浄化

戦争の目標は「領土拡大」。それが一番わかりやすいからだ。

ボスニアが1992年3月に独立宣言した直後、セルビアが東から、クロアチアが西から国境を越えて攻め込んだ。両国は「ボスニアの山分け(領土分割)」の密約を結んでいたのだ。

ボスニア戦争は領土分割戦争だった。ひとつの村を取ったり取られたり。その際、異なる民族を追い出したり、殺してしまう。これを「民族浄化」と呼んだ(異民族を取り除いて土地をきれいにするという意味)。

この本のテーマである「サラエボ包囲戦」も、セルビア民族主義勢力が首都サラエボの半分を要求したことが発端だ。これが3年半も続いた。(詳しくは46ページの解説で)

ボスニア戦争の後遺症

20年も前の戦争だが、21世紀の現代にも影響を残している。この戦争がきっかけになって、戦争犯罪などを取り締まる国際裁判所が設置される一方、国連の承認を得ないで、アメリカがほかの国を空爆するという悪い前例もボスニア戦争で初めて実行されたものだ。

宣戦布告なき開戦、正式の兵隊ではない武装勢力、残虐行為と戦争犯罪、外国人兵士の募集――これらが、イラクやアフガニスタン、シリアなどでの戦争のモデルになった。最近、中東から多くの難民が脱出した問題も同じ根がある。

ボスニアをふくむ旧ユーゴスラビアの紛争をうまく解決できなかったことが、現代の戦争につながっている。

サラエボ包囲戦――なぜ逃げられなかったのか

千田善

1,425日間の包囲戦

ボスニア戦争の中でももっとも多くの犠牲者を出した「サラエボ包囲戦」は1992年4月から1995年10月まで約3年半続いた。ただし、町に自由に出入りできるようになったのは停戦の翌年1993年2月のことで、それまでの1,425日間を「サラエボ包囲」という。世界史上もっとも長い包囲戦だ。

足かけ4年のあいだ、サラエボでは11,000人以上が殺された。そのうち子どもは1,600人。

サラエボのまわりをかこむ丘の上から、セルビア民族主義の武装勢力が銃や大砲を町の中に撃ち込んだ。70年あまり前に日本が空襲されたとき、アメリカ軍の爆撃機は太平洋をこえて1,000キロ以上も飛んできたが、サラエボではたった数百メートル先から、いつも狙われていた。

しかしサラエボの人びとも、ずっと防空壕に閉じこもってばかりでは生活できないので、水を汲みに(水道はずっと断水だった)、配給物資を受け取りに(まともに営業している商店などなかった)出かけた。見通しのよい道路などでは「スナイパー（狙撃手)」という兵隊に狙い撃ちされるため、建物の陰から陰に走ってわたった。

戦争中も学校は休みではなかったので、子どもたちはがんじょうな建物や地下室を教室にして勉強をした。放課後は高い建物にかこまれた空き地で遊んだ。爆弾が真上から落ちてくると避けようがないが、子どもたちはそれでも、爆弾の破片のコレクションなどの新しい遊びを「発明」した。

多民族共存の理想

ボスニアにはムスリム人(ボシュニャック人とも呼ぶ)、セルビア人、クロアチア人の3つの民族が暮らしている。3民族とも話す言葉はまったく同じ。見かけも変わらない。宗教と歴史の違いがあるが、サラエボなど都市部では、クリスマスやバイラム(イスラム教のお祭り)などでおたがいにパーティに招待するなど、仲良く暮らしていた。

民族の違いを超えて結婚したカップルもめずらしくなかった。そういった人びとや彼らの子どもたちにとって、この戦争はいっそうつらいものだった(解説24ページ参照)。

丘の上からサラエボを攻撃したのはセルビア民族主義の軍隊だが、セルビア人でもサラエボにあえて残って「民族の共存」の理想のためにたたかったものがいる。ボスニア軍最高幹部のヨビッチ参謀総長もセルビア人だった。

人質になったサラエボ市民たち

この本の読者のなかには、子どもたちも両親も、どうしてそんな危ない町から逃げなかったのかと不思議に思う人もいるかもしれない。

しかし、逃げられなかった。サラエボはぐるりとかこまれて、すき間は空港の滑走路だけだった(国連が管理していた)。滑走路を走ってわたろうとしても、スナイパーに撃たれる。多くの人が、ここで生命を落とした。

一方、サラエボを守っていたボスニア政府にとっても、市民がどんどん逃げ出して行くと町を守れなくなるので、重い病気の患者など特別の理由がある人以外、町の出入りを禁止した。戦争がはじまって1年あまりして滑走路の下に秘密のトンネルが完成し、「外の世界」と連絡が取れるようになったが、軍人や役人専用だった。

だから、サラエボの市民たちは逃げられなかった。「外からは爆弾の標的」「中からは人質」として二重に逃げることができなかったのだ。

ふだん通りの生活が意思表示

軍人ではない一般の人びとの「抵抗の意思表示」は、普段着で生活することだった。戦時下でもみすぼらしいのはいやだと、女性ならちゃんと化粧をしてスカートにハイヒールという戦争前の通勤姿で外出した。

戦争中も映画館や劇場はやっていた。ミス・サラエボのコンテストなども「ミス包囲都市コンテスト」として開催した。日本なら、文化や娯楽はまっ先に「自粛」するところだろうが、サラエボではこうした活動が戦時下の人びとの気持ちを支えた。

さらに、爆弾が降ってくるひどい生活の中でも、ジョークを言って笑わせる。ボスニアに「イナト」(意地に近い意味)という言葉がある。普段着で、戦争の悲惨さを笑い飛ばそうとする「サラエボ精神」は、戦争という野蛮にたいして自分たちこそ人間的だと証明する「意地」そのものだった。この本にもあちこちに、悲惨な中にもニヤリとさせられる言葉がある。サラエボのユーモア精神は筋金入りなのだ。

戦争から20年たっても、ボスニアは完全に平和になったわけではない。この本の執筆者たちは、戦争のことを忘れないことが(次の)戦争を防ぐ手段だと考えている。

私も戦争で負傷した子どものひとり。
辛かったけど、友だち関係は今よりずっとよかったわ。
アリヤナ1980

言葉にできない何かが、私たちのなかにはずっとあると思う。
レイラ1977

夜。水をもらいにいくところ。2リットルのタンクを受け取る。砲弾が降ってくる。でもぼくは水運ぶ自分をものすごく誇らしく思ってるんだ。
ベダド1987

廊下。豆鉄砲。ガレージ。雪。ろうそく。バルコニーの菜園。赤みがかったグリーントマト。
レナト1984

不安。恐怖。希望。友情。
よりよき明日を夢見ること。そんな日がけっしてこなくても。
ジェシーナ1981

毎日毎日地下室を歩きまわってた。
年上の子どもたちとたのしく過ごした。
アマル1990

甘いランチパックがくるのはいつだ……うう。
ハリス1988

アニメ「ニンジャ・タートルズ」の最後の5話をいまだに見ていない。
ナイダ1982

希望は失われたけれど、意識を高く持って、また再生させた。
大人になることの残酷さ、そして信じられないほどうつくしい友情。
ウェスナ1976

音でどこに爆弾が落ちたか当てっこしながら、ベンバシャ滝*で服を洗ってた。
アズラ1978

*サラエボ市内を流れるミリヤツカ川の上流にある、高さ2～3mの人工の滝。夏はここで水遊びをする。

濡れた靴下をはいて、ポリタンクを持って、震えながら給水車を待つ列に並んでた。
オメル1989

アーケードのガラス屋根に反射する朝の太陽。
ダミール1987

パン屋でパン3個と交換してもらうためのビールケースをさがそうと、地雷の埋まったサッカースタジアムに探検しにいったこと。
エディン1980

ベランダで、
タンクに入った5リットルの水で体を洗うこと。
自分のぶんさえ、もらえないこともあったけど。
マーシャ1988

毎月1日に、人生でいちばんつらかった試練について、誇らしく思い出すんだ。

ハリス1985

地下、涙、ずっと泣いているママ、黒板のない学校、チョコレートの夢、三つ編みにした髪、恐怖、涙……

ジェナーナ1980

暗闇の寒さ……

ハリス1987

遊びかたやたのしみかたが、うんとシンプルになった！

カニータ1980

戦争中の幼少期。地下室、水運び、
でもいちばんに思い浮かぶのはマカロニ！

アルマ1983

子どものころの思い出といえば、サイレンと爆弾の音だけ……。
恐怖の記憶の痕跡のように、庭で見つけた銃弾。

エミーナ1990

親指トム合唱団、ユーゴスポルト*、15分の授業、
圧力鍋で作る自家製パンのにおい。
山ほどのキャラメルとだって、
このパンは交換なんかしない。

アズラ1982

*セルビアのスポーツ用品メーカー。

エントロピー……暗闇……よどんだ空気……悲鳴と泣き声……痛み……沈黙……空腹と渇き……四方を囲む壁の外に出たいという心からの願い……

アイラ1988

恐怖と不安。

マイダ1984

砲弾、地下室、自転車で鳴らすラジオ、ガレージや地元の店で開かれる学校、夜中の給水車、ろうそくの明かりで読書。

ハッサン1981

「おれたち2人だけがロックしているのなら　みんなこう言うぜ
ぜっっっっっったい　こんなことだれの身にもくりかえしてはならないと！！！」*

エンダール1978

*1992年（戦争1年目）に発表されたケマル・モンテーノの反戦歌にして愛国歌（愛市歌）、ラブソングの歌詞。このフレーズの直前、「俺がどこにいるかって？　俺はぜったいこの町を出て行かない」。

戦争中、子どもの私は病院と隣り合わせだった、深いかなしみ、泣き声、絶叫、サイレンの音……
でも子どもたちでゲームをして、無邪気に笑うこともあった。

アムラ1983

戦争中に子どもでいるってことは、子どもではいられないってこと！

セルマ1983

自家製パン一切れを油に浸し、貴重なコショウをちょびっとふりかける。お隣のアカドさんちで。

ケマル 1982

ベトナムのビスケット*、米粉のパン、おもちゃにしてた爆弾の破片、でもときどきは外に出られてたのしかった。少なくとも最初の砲弾が落とされるまでは。

エリラ 1978

*人道物資のなかにはしばしばベトナム戦争時に作られた米軍のビスケットが入っていた。

地下室、マカロニ、2回焼きなおしたパン、砲弾、水タンク……

マーシャ 1981

おとうさんが甘いお菓子を持って前線から帰ってくるのを待ってたわ。前線が何かも知らなかったけど。

エナ 1991

おばあちゃんの揚げパンのにおい、ぼくらの住む高層マンションの管理人、ズゲンボさん。

アナディン 1988

たいせつな人生経験

——そこで私たちはみんな等しく追い詰められた。

シェフィカ 1976

はじめての恋、はじめての真の友情、はじめてのサッカー試合、はじめてのワールドカップ*　^_^

ネディム 1983

*1994年アメリカ大会をテレビで見たことを指すと思われる。

すごい皮肉――こんなにもおぞましいのに、でも、すばらしい子ども時代だったって思うんだ。

アレン 1977

昼も夜も爆撃から逃げて過ごした。おかあさんが、食糧と水の配給の行列から、無事に帰ってきますようにと祈りながら。

ダリオ 1984

恐怖の味がする粉ミルク。

イゼダ 1985

創造力があったから、閉じ込められたような場所で、子どもたちがいかに無邪気に遊べるか見せつけることも、自由も、作り出すことができた。

ダリア 1979

ブラーツァ方面*から爆撃があると、
私はいつも甲高い声で叫んだわ。
「だれかノックしてる！　ノックしてるよ！」
って。

ネイラ 1991

*サラエボの南西部の丘。

赤新月社*のマーク、缶詰のごはん、ポンプの水、ろうそく、ガラス用のプラスチックシート、火薬のにおい、死……

ボリス1978

*イスラム圏における「赤十字社」の名称。

爆撃のあいだ、地下室でアンデルセン童話を読んでいた。

アミラ1982

人生で本当の友だちに会えた時期。
彼らは今も、ぼくのことをわかってくれている。

ワヒディン1980

生きてるだけでしあわせだと思うこと、ランチパックと米粉のパイ。

ネジミナ1987

防空壕、ドーナツ、ショー――ぜんぶ即興で用意したもの。
意地、一夜にして大人になること！

メディナ1979

戦時下の大問題――ママ、何かお菓子ちょうだい(>_<)

エルマ1983

怪我をして、目覚めた病院で、隣に眠る母を見た瞬間。

アミーナ1988

そのアパートにいた6人の子どもで地下に集まり、いろんな遊びをした。仮装舞踏会を開いたこともある。

マイダ 1982

パンのかわりになるものがなんにもない。
これが、戦争中に子ども時代を過ごすってことだ。

ミルザ 1984

毎日暗闇のなかで暮らす、夜明けはけっしてやってこない、遠くをぼんやり見つめてる、戦争とは私の人生の消えないかなしみ。

マーシャ 1980

母の肘に高射砲の銃弾が命中した……さいわい爆発はしなかった。奇跡によって、母は腕を切断しなくてすんだ。神さまとお医者さんに感謝しています。

アルマ 1979

包囲されたなかでのパーティほどたのしいものはない！

ベリド 1978

ほのかなろうそくの明かりの下で、
文字をおぼえ、手紙を書いた。
怪我をして入院している姉宛の手紙。

エルマ 1987

戦争中の子ども――薬莢で遊び、「花火」を眺め、地下室でビー玉遊びをする……つまり生きていられればしあわせってこと。

ネディム 1990

大混乱。

エルマ 1981

現実とのつながりがぜんぶ崩壊し、
自分だけの魔法の盾に閉じこもった。

ズラータ 1978

爆撃で学校は長期休暇！

アディ 1977

白黒のロールケーキ、おかあさんのおなかの上で眠ったこと。

エミーナ 1982

喪失、恐怖、落胆、痛み、暗闇、空腹、寒さ、いきなり大人にさせられる！

デニヤラ 1974

通りで子どもたちはおしゃべりしてた。
みんな外に出てきて遊んでいると……
またサイレン。
それが私の子ども時代の音！

ネイラ 1992

水タンク、砲撃、地下室、迫撃弾、イカール缶詰、軍服の父、配給のランチパックがうれしかったこと、人道支援物資を待つ列。

ナイラ 1981

ものすごい経験だった。
ほかの子どもたちにはぜったいに味わわせたくない！

イスミール 1980

おそろしくて、かなしかった……子どもでいることも許されず、だいじな人も奪われる……知らない人のやさしさ……希望。

ドラガナ 1982

地下室で、ほかの子どもたちとすごく仲良くなった。
宗教も国籍も関係なかった。爆撃のなか、ぼくたちはひとつだった！

ダルコ 1987

夢、おもちゃ、絵本、ドレス、通り、公園、すべて置いてきた。
何もかもなくした、思い出以外。

アイダ 1985

戦争の記憶といえば、友だちを失ったかなしみと、町の勇敢な人たちへの敬意だ。

ラリサ 1977

ベランダでおばさんに
抱っこしてもらっているとき、
頭のすぐ上を爆弾の破片が飛んでった。

タリク 1991

人道支援物資バッグから取り出した石鹸をガブリ。
お菓子だと思ったの。
ファティマ1989

これがほんもののバター？！
レイラ1977

朝起きて、明日ってくるのかなと考える。
障害物よ！――それがつねにぼくたちを前に進ませる！
ミルザ1983

砲弾が居間を爆撃し、ぼくは怪我をした。なぜ、と思う。
どうしてぼくはまだ子どもなんだろう？*
ジェナン1985

*大人だと前線にいけるから。

ふつうとはまったくちがう方法で大人になった。どんなちいさなことでも、しあわせだと思ってきた。
ジャナ1981

ろうそくの明かりで読書、戦争ごっこ、マリンドボール地区*で、見たこともないほど熟した果物を盗んだこと……

マヤ1985

*マリンドボールは新市街の地域名。サラエボ大学本部近く。旧市街近くのビール工場までは往復約4キロほど。

銃撃の音をじっと聞いているだけで、何が起きているのかわからない。
11階のアパートの上空を、毎晩銃弾が飛び交っていたのをおぼえてる。
ぼくはそこで人生最初の数年を無駄にしたんだ。

アマル 1990

はじめてもらったオレンジを壁に向かってシュートした。
そのちいさなオレンジは、本当はボールだって思いながら。

アメル 1991

忘れられない体験。

ネディム 1979

あんな時代に子どもでいることなんて、だれも望んでいない。
でも、選択の余地はなかった。

ズラータ 1989

建物の前でずっとボール遊びをしていた。水くみや、砲撃のとき以外は。

アレン 1981

いろんなことがあったにせよ、ぼくの幼少期は人のあたたかさで満ち
ていた。おもしろいおもちゃもたくさん作ったしね。

ヤスミン 1983

サラエボを去っていく友人、学校閉鎖、ろうそく、
水タンク、シェルター、ランチパック、
何もかも不足……

アシヤ 1985

みんな同じ境遇だったから、とても仲がよかった。
あんなつらい状況のなか、たくさんの友情があった。
イゴール 1976

ランチパックの入っていた大きなビニール袋をそりにして遊んだ ^_^
メリマ 1984

「停戦」期間に遊んでいたら、不発弾爆発。
アドナン 1981

おばさんがオレンジを買ってくれて、そのはじめての果物を、皮ごと食べはじめたらおばさんが「そうやって食べるんじゃないよ」って言うんだ。
それでぼくは「そうなの？」って言った。
「じゃ、この皮はぜんぶ捨てちゃうの？」って。
アマル 1988

ぼくにとって幼少期は、けっして忘れられないもの。
痛みに満ちた、なんともいえない体験。
ルスミール 1983

毛布のテントのなかでおかあさんと遊んだ。
今思うと、そうしてぼくを迫撃弾の破片から
守ってくれていたんだね。
エルダール 1990

私たちは幼くて、何が起きているのかわからなかった。私はただ、銃撃がやむことと、水道からきれいな水が飲めることを望んでいた。

アーニャ 1986

地下室で子ども同士遊び、パパが「旅」から帰ってくるのを待つだけだった……それってすごくいたましい記憶よね。

リアルダ 1988

砲撃のせいで外ではできなかった遊び……恐怖、かなしみ、ショック、早すぎた成長、ほんの少しのいい思い出。

ミレラ 1978

リヤド・ガルボ(1981 ～ 1995年)、安らかに眠れ。
卒業式*の前日、自分の「分け前」を買いにいき、それきり戻ってこなかった。

アドナン 1982

*初等科は8年制なので14歳で卒業を迎える。

地獄のなかのちっぽけな天国！
砂漠のなかの水一滴！
そこらじゅうにばらまかれた
悪意と憎悪の種に対する、
海ほどの愛！

アドミール 1985

近所のお年寄りにもらったカチコチのチョコレートを、
時間をかけてちびちびと食べること
――それが、あのころのぼくの生きがいだった。

エミール1987

のちの人生のすべてを、あの戦争のときと比べてしまうという、
いやなトラウマ……

ケマル1982

神さまを信じること、自分と他者への気遣い、卒業式の中止、フォークダンス、恐怖、緊張、不安……

ハリス1977

戦争中の幼少期とは、暗い色で描かれた虹だ。

ナイダ1990

爆弾破片集め。

アディス1983

ガスでも使えるよう改造した
木炭用コンロに点火するとき、
毎朝起きたちいさな爆発。

スンチッツァ1976

戦争とは何かを身をもって学んだ。子どものときに負傷したから。

セミール 1979

知らない、ってこと。鳥じゃなく、砲弾の飛び交う空の下で遊んでいた。1993年に父は死んだ。知らない、ってとてもさみしいことだ。

ナイダ 1989

私にとって子どもだった時期というのは、1回読んだだけで、二度と忘れられない物語……。期待。

シェイラ 1984

もらった人道援助パックに間違ってオレンジが入っていた。
でも私が17歳になっていること*がばれて、とりあげられた。

サネラ 1975

*人道支援では「子ども」は16歳未満とされた。

生きたいという願い、もとどおりになってほしいという願い、恐怖よ去れという願い！

アリヤナ 1977

砲撃のあいだ、
スケンデリア*でずっと寝ていた。
おとうさんが地下に運んでくれたときも、
目を覚まさなかったんだ。

ゴラン 1987

*スケンデリアはサラエボの文化・スポーツ施設。オリンピックではフィギュアスケート会場になった。

粉ミルクと、それをもらったときうれしかったのをおぼえてる。

メリナ 1990

10歳のとき、死んだ友だちがトラックに「積みこまれてる」のを見た。
そのあいだに散水車が血を洗い流していた。

アムナ 1985

部屋の隅で音をたてる丸ストーブ。なかでは靴が燃料として燃やされて、上ではイカール缶詰がぐつぐついってる！

ダミール 1981

戦時下の幼少期とは、日用品の不足。
それから、戦争のさなかとは思えないような不思議な事件に遭遇すること……

ベルマ 1978

はるか遠くの地では、私と同い年の子がパーティをたのしんでいるというのに、私は水タンクを両肩に背負っていた。

スアダ 1976

埃っぽい地下室、暗闇、恐怖……
でも生きてるって、
子どもの笑顔くらいすてきなことだった。

エルマ 1983

当時は、なんでもゲームみたいに思えた。
時間がたってみると、むしろ苦難のように思う。
アフメド1979

うーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーん！
アルミン1978

子どものときに戦争があったおかげで夢見がちになった。
今でも空想にふける癖があるんだ。
ズラタン1981

薬莢、恐怖、迷子、ディーノ・メルリンのミュージックビデオ「幸福な兵士」を見て、自分があの少年*だったらと想像したこと……
アルミン1989

*MVの中に子どもが兵士からお菓子をもらっているシーンがある。

割れたガラス、あたらしい火薬のにおい、埃。
メリマ1987

私にとって戦争とは、ランチパックのなかに40年前、ベトナム戦争時のビスケットを見つけたときのよろこび。
ゴラナ1988

ラテン語の勉強をすることに罪悪感をおぼえた。
その日、私が一緒に遊ぶのを断ったから、
ひとりでそりすべりにいった友だちは、
砲撃で吹き飛ばされたのだ。
レイラ1978

窓に貼られたビニールシート越しに外が見えればいいのに。
外に遊びにいきたくて泣いていた。

メリサ1986

なんたる皮肉。戦争というたいへんなときにもかかわらず、私の幼少期は、人生でいちばんうつくしい時代だった。

アルマ1987

みんなおなかがすいて、のどが渇いて、裸足だった……子どもでいることはできなかった。でも、よりよき明日への希望や夢は手放さなかった。

スラビッツァ1980

子どものころと聞いて思い出すのは、戦争から父が帰ってくるのを待っていたこと……でも1993年10月23日、父は帰らぬ人となった。

イルマ1989

戦争という言葉の意味をよくはわかっていなかった。
でも、笑顔やよろこびとは無関係の、何かおそろしいものだってことはなんとなくわかってた。

アメラ1988

隣のアパートで砲弾が2発爆発したとき、ぼくはとても冷静に、それがRPG*だと言い当てて、古い小説を読み続けた。

エディン1982

*携行式の対戦車ミサイルのこと。

「グッドラック！」その言葉をおぼえてしまって、大好きな人たちがどこかにいくたび、グッドラックと言っていた……

ミレラ 1983

洗面器を持って、雪を入れるために下に降り、家に持って帰り、融かし、暗闇のなかで体を洗う。電気がふたたび通り、水も、ブーンと鳴る音も、ガスももとどおり……

フェダ 1982

遊びのなかに、弾丸と砲弾の音が混じってる！

ミルザ 1985

最後におとうさんを抱きしめた、あの子どものころに帰りたい。

セルマ 1987

乾燥して埃っぽい夏、
なんとかして海にいけるかもっていう永遠の夢……

ニベス 1984

砲撃がはじまった。
避難するため、
おかあさんはぼくを玄関に引っ張っていくが、
いきたくなかった。せっかく電気が通っていて、
テレビでアニメを見ていたから。

セナド 1989

もう生きていない人たちのかわりに鼓動させるため、私は自分の心臓をずっと遠くに置いてきた……かなしみがいえることはない……

サミラ 1983

父の働くビルに飛んでいく砲弾を目で追いかけていた。

ハルン 1991

裏庭の焼け焦げた「ラーダ」*に毎日乗っていた。フェラーリに乗っているって想像しながら。フェラーリがどんな車だか知らなかったけど。

ベダド 1988

*ロシア製乗用車の名。

親切なご近所さんが、
てのひらにキャンディをのせてくれたときの幸福……

マイダ 1982

少年の夢は悪夢になった。

ミルネス 1977

やっと手に入る鶏の卵が腐っていると知った子どものかなしみと絶望は、はかりしれないよ……

ミヤ 1977

子どもではいられなくなる
たくさんのつらいことがあったけど、
戦争中、私はたいせつな友だちを作った。

イェレナ 1984

砲弾の音を聞いたときの恐怖、
私が叫ぶのをやめさせようとおばあちゃんがついた嘘、
太陽のない4月。
エルマ 1984

砲弾が落ちるたび、私はママに言っていた「あれ、ただの雷よ」。
サミーヤ 1989

ちっぽけなことによろこんでいた。
ふつうに暮らしているように見せかけて、いつも現実逃避していた。
アメラ 1978

戦争……
避難、母の涙、恐怖、血、ときどき食べるかび臭いパンの切れ端……
エルマ 1991

前線から戻ったおとうさんが10個のガムをくれて、兄といとこたちと分けた……
アニサ 1988

父が殺された。
カセマ 1979

ブレカ地区のみごとなさくらんぼの木の下で、寝そべってその実を食べていた。
そのころ、「わが軍」の迫撃砲はポリネ地区*を破壊していた。
ハリス 1980

*ブレカは前線に近い地区、ポリネはセルビア人勢力側の陣地があった。

地下室のかび臭いにおい、湿気、砲撃されたときに舞うほこり、
「白い牙」*という本の隣で燃え尽きたろうそく。

ビルダナ1987

*ジャック・ロンドンの小説。

大惨事。

ミルネル1986

11歳のとき、友だちが腕から弾丸をえぐりだすのを手伝った。
私たちは生き残り、今も生きていて、子どももいる。
でも、そうじゃない人もいる。

アリサ1980

ぼくにとっては、一種の冒険であり忍耐であり恐怖。
両親にとっては、サラエボの防衛は成功するかどうかってことだった。

セミール1979

恐怖。砲弾のブーンって音。弾丸のヒューって音。叫び声。死亡ニュース。
そして、こんな日々もいつか過去になるという希望。

アイダ1977

地下貯蔵庫のドアのフックにかかっている父のライフルが、翌日も同じところにあるかどうか考えていた。

タリク1991

戦って、たいせつにしていたものを
すべて失った。防衛してもまた敗北……

ボヤナ1984

ラジオで音楽を聴いていた。
だれかが交代で自転車のペダルを漕いで発電してくれたから。
ヤスミナ1979

おぼえているのは、米粉でできたチーズパイ。
乾いたパン屑で作ったミートパイ。豆のパテ。
エルベディナ1988

姉とチョコレートを分け合った。
姉はひとかけ齧っただけで、残りはぜんぶ私にくれた。
私がうんとちいさかったから。^_^
ウェスナ1987

戦争中に食べたチョコレートは忘れられない。
なくならないように、毎日半かけらずつ食べたの。
だから忘れられないのよ。
アンジェラ1982

一種の重圧、期待、明日はよくなっているという希望。生き延びること。
エドハト1984

1992年5月2日を忘れない。
郵便局が燃えていた。
いや、正確には、サラエボじゅうが燃えていた。
あの日はぜったいに忘れない。 ｀∧´
イナ1980

強制的に大人にさせられ、おもちゃのかわりに、戦争にかんするあれやこれやを手に取らされた、人生の一時期。

アドナン1984

弾丸より速く、砲撃より強く、戦闘機より自由――子どもがよろこぶもの、それは愛！

バキール1989

毎朝目覚めるたびに感じる恐怖、鳥の鳴かない静かな朝……叫び声、唸り声、不安……私の味方は、ぎゅっと握ってくれた母の手だけだった。

レイラ1985

まあ、よかったよ……
人殺し、発砲、血、不眠、不安、空腹、寒さ、そんなものがなければね……

アドナン1980

何も持っていなかった、でも生きているだけでしあわせだった。

レイラ1983

地下室は寒かったから、いつもウールのソックスを穿いて、帽子をかぶり、服を着込んで寝ていた。

ステラ1978

実現不可能な夢。

アドミール1981

芯が燃え尽き、数滴油のうく汚れた水に浮かぶ、灯芯
――もう本が読めないことに絶望していた。
マナ1982

子どもを子どもらしくさせてくれるものの何もない、暗い、泣いてばかりの成長期――ゲームも笑い声も愛する人の笑顔もなく……
アドミール1984

恐怖、空腹、苦しみの数年間――でも精神的な深いつながりもあった。
センカ1987

父が前線から無事で帰ってくると、たまらなくうれしかった。
アルネラ1988

暗い――どっちを向いても壁、湿気に窒息しそう……
太陽を返してほしい。
メリサ1980

唯一暖房の効いた部屋で体を洗った。砲撃がはじまったらすぐ逃げられるよう、服を着込んでベッドに入った。
ベリーナ1983

1994年の夏の日、
川沿いの土手を自転車で走っていて、
スナイパーに見つかった。
ビール工場に水をもらいにいく途中……
サルミナ1979

未来へのメッセージ:人類は腐った種族だ！

サビーナ 1987

怒った男たちが窓をたたきまわっているあいだ、体をまるくしておびえてた。こわい……だいじょうぶ、私は生きてる。

エミーナ 1981

おとうさんがぼくを前線に連れていってくれるのを待っていた……
質問:パパ、いつ戦争は終わるの？　答え:すぐだよ、あと少しだ。

ハリス 1990

友だちといっしょにいた……仲良しだった……街灯のかわりの月と星空がすばらしかった ^_^

サネラ 1977

地獄！　今も私を苦しめる。

アダレッタ 1980

玄関ホール、夜、ギター、空に光るロケット弾、「塔の時計が時を打つとき……」*って歌をうたっていたこと。

ミルナ 1982

*サラエボのバンド「赤いリンゴ」の楽曲「きみの唇」。その歌詞の冒頭。塔とはサラエボ中心部のイスラム寺院のそばの時計塔を指す。

「タクシー」というシールをつけた手押し車に水タンクを積んで、ビール工場に向けて出発する。

アミーナ1985

いかなる瞬間に迫撃弾が落ちてきて、流血の惨事になってもおかしくない。そうすればゲームは終わる、という奇妙な感情……

メリハ1080

子どもにとって戦争とは、ディーノ・メルリンがうたう「幸運な兵士」が、MTVのヒット曲みたいに思えること！！！

アルミール1987

キャンディは1個で充分。2個目はほかの子たちにあげなくちゃ。

イルワナ1984

子どもでいられた時期なんてない。
すぐに「大人」になって、戦争とは何か、砲撃とは、シェルターとは、スナイパーとは、塹壕とは何かを知った。死者と負傷者も……。

ミレラ1986

子どもにとって戦争とは、
1本のカーネーションと
2かけのチョコレート ^_^

メリハ1988

新年、おとうさんからチョコレートをもらった。
それが食べものだと知らなくて、だいじにとっておいた。
ナイダ 1990

穴だらけの建物の、暗くて狭い地下室。
アドミール 1988

あんまりよくおぼえてない……おぼえてるのは、ずっとこわくて緊張してたこと、妹が怪我したときにかなしかったこと……あっ、そうだ、粉末卵もあった！！！
ナジャ 1978

そのときはじめてレンズマメという食べもののことを聞いた。
ベジール 1980

水タンクでそり遊び。
エミーナ 1981

大人たちの浅はかさで、台無しにされた人生の一部。
エルビル 1987

地下室で過ごした長い日々。胃袋は空っぽ、
妹はいたけど両親はいなかった。
ぼくは15,000人の怪我をした子どものなかの
ひとりだ*。
アネル 1982

*サラエボ包囲1425日で、死亡した子どもは1,601人、負傷者は14,946人に及んだ。

サラエボで砲撃がはじまると、ぼくはいつも、ほかの子どもとおんなじことを考えた。どんな砲撃も通さない地下室があればいいのにな。

ケナン 1990

戦争中の子ども時代……ずっと寝てた。

イスマール 1977

テレビがついたときと、電球がともったときのよろこび。

オグニェン 1980

はじめてディスコにいったのは戦争中だった。ヒッチハイクして、トラックに乗せてもらって、運転手はディスコ前で下ろしてくれた。

ダダ 1977

涙、震え、恐怖、その後遺症に今でも悩まされている。心配性で神経質。たくさん時間がたったけど、私はまだ苦しんでいる。

エスミラ 1986

沈黙。

サーシャ 1982

マルタ橋*で、スナイパーの撃った弾が
ママの水タンクに穴を開け、
ママはわーっと泣き出したんだ。

ニハト 1981

*サラエボ新市街フラスノ地区。前線に近いところにあった。

かなしみとしあわせ。
かなしみ―世界でもっとも醜いものを見聞きさせられ、
感じさせられた。
しあわせ―そういうのをぜんぶ、友だちと共有したこと
ダニエラ1983

砲撃と弾丸の飛び交うなか、シェルターの子どもたちと戦争ごっこをしていた。
エルディン1990

「ヌテラ」*よりもおいしいユーロクリームのチョコレートスプレッド。
ダミール1988

*ヌテラはイタリアメーカーのチョコ風味スプレッド。ユーロクリームは旧ユーゴスラビア時代から続く、国民的なスプレッド。

戦争、砲撃、暗闇……そのなかで電気が通るのを待っていた。
94年のW杯の決勝戦を見るためだ。ブラジルvsイタリア戦は、ビルの前に立つぼくらの、ものすごいよろこびだった。
ミルザ1981

広告を見て、ものすごくチョコレートがほしかった！　恐怖、ママの涙……それらは今のほうがいっそう私を痛めつける。
セルマ1987

夏の午後、どかんという音、その後は静寂だけ……
もうもうとたちこめる黄色い土煙、
ひとりの子どもの人生が変わった瞬間。
レイラ1978

子どものときに戦争だったというのは、ぼくたちの知っている唯一の幼少期で、ほかは知らない。ふつうの子どもがどんなふうかなんて。

ケマル 1984

恐怖、暗闇、そして一筋の光、闇は淡くなり、希望が残るだろう。

レイラ 1987

すべてのホラー映画に、恐怖を和らげるちょっとした気晴らしがあるように、戦争の混乱のなか、ほんものの、忘れられない恋をした。

イボナ 1987

準備ができて、建物から出ようとしたのに、家にいなきゃいけなくなった、1分前に近くで砲弾が落ちたから。むかつく！

レイラ 1980

ぜんぶうまくいくってママをなぐさめること。

サビーナ 1979

私や同世代の人たちは、ものすごく多くを奪われたけど、それでも子どものころは忘れがたい。

ミネラ 1983

さいの目に切ってトーストしたパン。玄関前に落ちた砲弾、バルコニーのパプリカの鉢植え、焼け焦げた靴、彼の不在。

ネイラ 1984

いつまでも捨てさることのできない私の一部。
ものすごくたいへんなときだったけれど、けっして忘れられないこともいくつかあった。それは何より、友だちとのつきあい……

メラ1980

1992年、一晩で、気づかないうちに、望んでもないのに、ぼくは子どもでいることをやめて大人になった。
自分のまわりの死や苦しみを見て、そうなったんだ。

ネルビン1978

水とパンがあれば、大きな口開けて笑ってたな ＾＾

ジェナン1984

かぼちゃの花で作った、見かけだけ似せた卵料理……おいしかった。

アムラ1982

チョコレートとコーラをよく夢に見た！！！

セナド1984

戦争中の子どもっていうのは、リビングの真ん中で、お湯入りのコーヒーポットを使って、母親が体を洗ってくれることだよ。

アニス1983

イカール缶詰、木材、お金がわりの缶詰、
戦争ごっこ、戦争ごっこの敵役には
なりたくないと願うこと、兄弟を失うこと、
復讐を思い描くこと……

ネディム1988

寒くて暗くてじめついたシェルターと、足元でバリバリ鳴るガラス。司令部から盗んだリンゴ。

イレーナ 1980

米、豆、レンズマメ、……ろうそく、車のバッテリー、水タンク……

エミール 1979

サラエボの郵便番号と同じ、この町を愛する71,000個の理由がある！

アニス 1990

おそろしいことがわが身に起きた……
血が流れていて、思わず私は「ママ、なんで私？」と訊き、考えた。
神さま、私何か悪いことした？

イワナ 1983

水とパンの列、部屋を照らすろうそく、暗い地下室、
ランチパックとM&M'sの興奮……

エミーナ 1982

ママはいつも私たちに、リンゴを半分にしてくれたんだけど、4歳の弟が言ったの。
「開いた」リンゴじゃなくて「くっついた」やつが食べたいって。

イルマ 1984

殺伐とした場所に閉じ込められた子どもたちの笑顔……

ナイダ 1988

戦争中に子どもだったと聞いて思い出すのは、パパが家に帰ってきたとき、パパだとわからず弟が逃げ出したこと。
アズラ1990

かなしみと恐怖、それから幸福、だって、子どもにとってもっといい日々があるなんて知らなかったから (-_-)
ハリス1987

ここでは戦争なんて起きていなくて、私たちは安全なんだっていう、私と弟の話にママが賛成してくれたことに感謝してる。
ビルダナ1988

地下室で歌をおぼえ、壁にはじめての文字を書いた。
ストーブにくべてしまって、紙なんてなかったから。
ベリーナ1989

かなしい、「真っ黒な」時代だけど、うれしい瞬間はたくさんあったの。
レイラ1980

イカール缶詰とピーナツバターのこと、ぜったいに忘れない ^_^
ネルマ1984

6歳の子どもが、
包帯でぐるぐる巻きの負傷者を見るなんて
ありえない。一生のトラウマ。
アドミラ1986

子どものころの思い出は、はじめてのローラースケート、世界でもっともすばらしい時期。玄関ホールでのローラースケートだけど ^_^

アズラ 1990

ハッサン・キキッチ通りで、ミレラ・プロチッチを失った日*。

マナ 1983

*第1部33ページ、45ページ参照。

砲撃のせいで外に出られず、兄弟といとこと地下室に閉じこもっている。真っ暗。こわい！　おなかすいた！
2度とだれにも起こりませんように！

アミーナ 1987

14歳の女の子が、誕生日に、パーティではなく、
マルカレ市場の大虐殺*の知らせを受ける。

アルミラ 1981

*マルカレ市場はサラエボ中心部にある。ここで記されている大虐殺は1995年8月に43人が砲撃で死亡した事件（第2次マルカレ虐殺）を指すものと思われる。

シェルター、ビー玉、給水の列、
ランチパックの列、友だちと時間をつぶす、
ちょっとしたことが
ぼくたちにはすべてだった！

ファリス 1988

1993年の秋、隣のザヒダおばさんがオレンジをくれて、
ぼくは世界一しあわせな子どもだと思った。

ダミール 1978

朝早く、おもてどおりで「解放！」と叫ぶ声が響いた。
「ママ、戦争が終わった！」と私は言ったんだけれど、
それは新聞売りの声だった*。

センカ 1983

*「オスロボジェーニェ（解放という意味）」は戦争中も発行され続けた日刊紙。1992年度、英BBC放送などが選定する世界最優秀新聞賞を受賞。

無……本当の無。
幼少期なんてとてもいえない、
あれは拷問だ……
だれの身にも2度と起きてほしくないこと！

セミール 1988

戦争……毎朝起きるたび考える:
いつか終わるさ！

ベンヤミン 1977

警報が鳴ったときのため、ぜったい安全な
とっておきの隠れ場所があった。
煙突のうしろのちいさな穴。
ママはいつも励ましてくれた。

スラジャナ 1986

その日はじめて、中心街の店に押し入り、薪にするために木製の棚板を持ち帰った。家に帰って驚いたのは、銃やそのほかの装備をした50人もの大人がいたこと。

タリク 1982

ブッコ、マーテ、ケケ、ネイラ、ズデナ……
友だち……

ジェリコ 1978

子どもでいることはできなかった。
迫撃弾やその破片がなんなのかわかるためには、早く大人にならなきゃいけなかった。

サファ 1983

夜、図書館が焼け落ちて、
朝、目覚めると町じゅうが
焼けた紙だらけだった……
黒い雪が降り積もったようだった……

タリク 1981

散歩をしていて、流れ弾に当たった人を見た。
子どもはおびえて、
血だらけのその人は叫んだ。
「息子よ、逃げろ！」

ズラタン 1979

戦争中、親である、ということがどういうことか、自分が親になってはじめてわかった。あの戦争中、料理のレシピを考え出した母親たちには本当に頭が下がる。

ダヤナ1982

キーノくん、サーレくん、砲弾、銃弾、ときどきチョコレート。

ネジャド1979

人生の一時期、あるいは奴隷の経験。いつもいつも、恐怖とかなしみと、よろこび、退屈、願望が混じり合っていた……

エルミン1984

父親なしで成長すること！

アルミン1977

給水の列での初恋。

アミラ1980

兄と私は庭で煉瓦の壁を見つけて、
そこから煉瓦を取り出して、
自分たちの隠れ家を作った。

サビーナ1983

サラエボの春のにおいは、埃と硝煙、
人間の体のにおいが混じっている。
記憶は淡くなっても、
においはずっと私を追いかけてくる。

イワナ1980

ガラス代わりに窓にはられたUNHCRのブルーシートの音。
断水だけど、雨水はある。忘れられない！
ヤスナ 1988

おもちゃなしで遊ぶこと。
エナ 1989

ろうそくのオイルランプの上で、母が「コーヒー」*を作っているとき、私たちはコーヒーポットに手をかざしてあたためた……
アミーナ 1985

*括弧付きで「コーヒー」とあるのは、大麦こがしで作った代用コーヒーのことを指すと思われる。

あの戦争を生き延びた—それは、平和を夢見るあらたな理由になった。
ボジャナ 1978

前線から戻ってくるとき、おじさんは何かしら貴重なお土産を持ってきてくれた。私は飛び上がって抱きつき、溜息をついたものだ。
私の大好きなココア！
アミーナ 1991

子どもでなんかいられなかった。
地獄だった……ぼくは子どもたちが
どんなふうに死んでいったかを見たんだ。
ハリス 1985

キーロや、キーロ*。つかまえて、おかずにしちゃうぞ！

ディヤナ1988

*男子の名前だが、この場合はペットの名前か？

戦争中の幼少期なんて甘い夢だわ。戦争は現実……。その現実の思い出のために私は早く大人になって、ボスニアの女になったんだもの！

エルマ1987

空腹とおそろしさ……

エレナ1984

化粧もしない、音楽も電話もない16歳。
どういうわけか男の子は、一夜にして男になった。肌の下で脈打つ恐怖。

エルマ1975

2年生だった。アパートごとに集団登校していて、爆発音が聞こえると、先生がよく言っていた、「荷物をまとめてください、家に帰りましょう！」。

アディン1986

その時期、私が体験した、すべてのすさまじいあれこれを語る言葉を持っていない。

ゴルダナ1981

ママ、スナイパーはただの悪人で、遠くにいるの。外で遊びたいよ！

セルマ1990

砲弾の音が聞こえないよう大声でうたって地下室で過ごしたって、
なんてかなしい思い出かと思う……
エミーナ1983

苦しみ！
ジャナ1982

戦争がはじまって最初のうちは最悪だ、何が起きているかもわからないし。あとになってわかる、「そんなに悪くもないさ」って！
サニン1980

ユニセフのノートにはじめて文字を書き、木と家の絵を描いた。
そのノートを今も持ってる。
エルザナ1990

トラウマ。
オスマン1981

つらい絶望の日々。チョコレートバーをまるごと1本食べることと、
アニメ映画1本最初から最後まで見ることをずっと夢見る日々……
ニーナ1988

大きな爆発音が笑い声を掻き消し、大人たちはパニック状態……

エミーナ1985

伸縮包帯でゴム跳びをして遊び、自転車のペダルを漕いで発電した。
アドナナ 1985

子どものころ、「吹き矢」で遊んだ。
「改良した」パイプを吹いて、紙の弾を撃ち合うんだ。
ダニエル 1988

キウイの思い出。
ママと私は切り株の上で、ふた切れのキウイを見つけて4個に切った。
マーシャ 1981

ドラム缶のストーブ、ユーゴスポルトのスニーカー、
荷車を引いた自転車。
ディーノ 1980

戦争中だって子どもは子ども……ナプキンやチョコレートの包み紙のかわりに、爆弾の破片を集めたってだけ。
サーニャ 1986

ひどいものだった。
戦争中は毎日毎日、父を亡くしたことばかり考えていた……
ビルダナ 1987

「ちゃんとした」朝ごはんを夢見てた数年間。
焼きたてパン、マヨネーズ、
それからコップ1杯のミルク。
サビーナ 1982

特別寄稿 困難な時期にどう生き残るか

イビツァ・オシム
元サッカー日本代表監督

戦争がはじまってすぐ、結果的にあれが最後のサラエボ行きになったのだが、ベオグラード空港で尋ねられた。「どちらまで?」「サラエボへ」と答えると、「サラエボ行きの乗客はあなた一人のようです」。1992年4月のこと、搭乗まもなくサラエボに着陸した。スチュワーデスが言う、「サラエボなんかでいったい何を? どこに行くんですか? 無理ですよ、飛行機からは誰も降りてはいけないのですから」。本当に乗客は私一人だった。機内で乗客には全員にウイスキーが振る舞われた。つまり私が一人で飲んだのだが ——。

これまで何度も多くの人びとから、戦争について話せ、あるいは何か書いたらどうかと誘われた。しかし、私が何をどのように書いても気に入らない人はいるだろう。そういうものだ。つねにデリケートな問題だ。しかし、この『ぼくたちは戦場で育った』は話が別だ。つまり子どもが話題の時は事情が違うということだ。この本は願いの本だ。小さくささやかな願い——ああ、あれがあればいいのに、これがあったらなあ——という願いだ。戦争がなければ、そのような願いは生まれない。戦争というアブノーマルな状況が、ふだんはあって当たり前のものへの欲望へと人間を駆り立てる。あらゆるものが不足すると、もっとも平凡なもの、パン一切れ、タマネギ一かけなどが巨大な存在になる。あの当時に子どもだった人びとの言葉から、当時の人びとの願いはとてもささやかだったことが分かる。そうした戦争を体験していない読者がこの本を読めば、小さなものが巨大な願いになる様子がよく分かるだろう。

結局、私は最後の便のひとつに乗ってベオグラードへと戻ったわけだが、サラエボ空港で目撃したのは、まるで大地震か何か自然災害にみまわれた空港で起こっている出来事だった。ここから脱出しようと集まってくる人びと。空港は超満員、飛行機には限りがある。中には私のことを見知っている人びとがいて、オシムのことだから何枚でも余分にチケットを手に入れるだろうと信じている。私の手元には自分の分の 1 枚しかないというのに。仕方がないので、空港中を駆け回り、なんとか 5 枚だけチケットを手に入れて、その人びとが脱出便に乗れるように分けてやったりしたのだが ――。

ベオグラードで私は、ユーゴスラビア代表監督を辞任した。大半の人びとは私の決意を尊重してくれた。しかし、その後しばらくして、今思い出しても胸が痛む出来事に遭遇することになった。ある日、小学生のグループとすれ違った。若い男の教師が引率していた。私に気がつくとその教師は言った。「ほら、ユーゴスラビアの裏切り者がいるぞ」と。そいつを捕まえてバラバラにしてやりたい気持ちだった。それにしても、自分には監督を辞任するほかに何ができたというのだろう。辞任会見で私は、これは自分の一身上の理由であり、私個人が決断したことだとのべた。それが自分の生まれた町のために私ができる唯一のことだったのだ。サラエボは砲撃されている最中だった。

いずれにしろ、辞任ぐらいでサラエボの状況が変わるものでないことも分かっていた。事態は予想をはるかに超えて悪化していた。サッカーでは何も変えられない。イタリア（1990 年のワールドカップ）で世界チャンピオンになっていたとしても、戦争は起こっていただろう。もう後戻りはできない。それほどひどい、激烈な戦争がはじまっていた。この年、1992 年にスペインのジャーナリストたちからインタビュー

を受けた。ある女性記者は、この戦争についてどう思うかと聞いてきた。答える間もなく彼女は自分がボスニアで目撃したことを話し始めた。ある村をセルビア人が焼き討ちにした。子どもまで殺し、ボールの代わりにその子の頭でサッカーをしていた。ひどい話だ。彼女はしまいには泣きながら、私に尋ねるのだった。しかし、いったい何が言えるというのだ。彼女はそこにいて、それらを見ていたのだ。そういう時に、人間は何が語れるというのだ。

戦争が続いている間、私はサラエボではなく、ギリシャとオーストリアにいた。サラエボには私の妻と娘が残っていた。初めて妻と連絡が取れたのは、試合でスコーピエ（マケドニア）に行った時のことだ。サラエボでは昼間から砲撃が始まっていた。夜になって、なんとか電話がつながった。少し話した後、妻は受話器をバルコニーの方に向けて、ほら聞こえるでしょと言った。見えないけれど、聞こえる。その砲弾はいつ、どこに墜ちても不思議ではないということを私は理解した。

電話が鳴るたびに、何か悪いことが起きたのではないかと思う。受話器を取り上げられない。いつも何かひどい知らせを待っている気持ちだ。その後（電話局が破壊されたため）サラエボには電話がつながらなくなった。その当時、私はアテネでパナシナイコスの監督をしていた。サラエボに連絡を取る時は、衛星通信かなにかの手段で呼び出す。サラエボでは電話ではなくアマチュア無線で受信するのだ。何度かこの方法で妻と話すことができたが、その労を執ってくれた人物の名をわたしは知らない。いつか探し出して礼を言いたいと思っている。その人物は私と妻が話したあらゆる問題について聞いていたはずだ。間もなく奥さまとお話ができます。はい、つながりました、お話し下さい。事務的な口調だ。生きるか死ぬかの話を、彼は黙って

聞いていたのだろう。

サラエボからの知らせの中で最悪だったのは、ジェリェズニチャル・サラエボで同僚だったスレイマン・クーロビッチが死んだという連絡だった。スーリョは気のいい男で、誰からも好かれていた。そんなやつを殺すとは。ああ、しかし、それが戦争だ。彼だけではない。母親の腕に抱かれている子どもが殺されたというニュースもあった。狙撃兵にはそれが母子だということが見えていたはずだ。意図的に子どもを狙ったということか。それが戦争だ。そういうことのできる人間とは、いったいどのような存在なのだろうか。戦争が人間を狂気に追いやるのだ。犠牲者はもちろん、加害者の中に知り合いの名を見つけたとしたら、どれほど悲しい気持ちになることか……。

そういう状況で、わずかながら救いになったのはサッカーだった。サッカーに集中し、試合のことだけを考えていると、一瞬でも戦争を忘れることができる。そういう時に、ひょっこり息子がやってくる。少しばかり話をして引き上げて行くが、また、サラエボや戦争のことについて考えないではいられなくなる。サラエボにいる家族は、娘は、妻はどうしているのか。妹は、母は、親戚は――。サラエボに行きたい。しかしサラエボに行くことはできなかった。いったいどうすればよかったのか。

この本を読むと、ちょっとしたことでもバカにできないことがよく分かる。ちょっとしたことというのは、毎日の日常生活の中で言葉に出したり意識したりしなくとも、それがあって当たり前のものごとのことだ。たとえば、ここに1個の干しイチジクがある。それがもし、飢えと渇き、頭上を銃弾が飛び交う世界にあれば、どれだけ大きな喜びを生み出すことだろうか。ささやかなことが、大きな喜びに変わるのだ。

それを理解することが、この本の大事な教訓のひとつだ。この本を読むと、人生にとって大事なことは何か、また大事なものになりうるものは何か、決定的に大切なものは何か、その感覚が研ぎ澄まされてくる。たとえば、あなたのかたわらに寄りかかることのできる肩がある。それはどれだけ大切なことか。何日もろくに食べていない人間はあらゆる感覚が消えていき、砲弾の爆発の振動に耐えるのが精一杯になる。それにしても、この戦争は戦争の中でも最悪の部類、なにしろ人間が生活している都市で起きた戦争だった。町に向けて銃を撃つのだから、はずれっこない。誰にでも分かることだ。町に銃口を向けている側の人間も、その銃口を向けられ狙われている側の人間も、この戦争はひどいと知っている。しかし、その真実と共に生きていくのは簡単なことではない。

この本が日本で発行されると聞いてとてもうれしい。私たちの戦災からの復興でもっとも力を尽くしてくれた国のひとつは、日本であると思う。その価値はけっして小さくない。日本の皆さんは自分自身の困難もかかえているのに、他人の苦労も自分のものと考えてくれた。私たちに多くのことをしてくれた。日本で生きていくのは楽ではないことを知っている。地震があり、台風や洪水など災害は多すぎるほどだ。よその不幸に関わり合う必要はないのだ。原爆の被害を受けたこともいうまでもない。日本人は戦争がどんなに勘定に合わないものかを知っている。それで平和的な国民なのだ。

思うに、日本の人びとはサラエボの子どもたちの体験に関心を持つのではないだろうか。世界中の出来事を知っており、他人の問題に心を寄せる。脅かされている人間はだれでも、日本人の中に友人を見つけることができるだろう。そのことに疑いはない。この『ぼくたちは戦場で育った』に収録されている多くの記憶は、私にとっては初

めてボールを蹴った時のこと、あるいは初めての試合の記憶を思い出させてくれる。サッカーは私にとって、それが困難な時であればあるほど、良い思い出や喜びを与えてくれる。そこで思うのは、近代の戦争をめぐる国際法や交戦規定の中に新しい条項を加えられないかということだ。もちろん、交戦規定など戦場では忘れ去られていることがほとんどなのだろうが、こんなのはどうか――子どもたちがサッカーをはじめたら攻撃してはならない。これを最低限の交戦規定として守ってほしい。さらに、人びとが水汲みに行くところを攻撃してはならない。そういう条項だ。最低限の規定ではないか。この戦争ではあらゆる交戦規定が無視された。葬式や埋葬に参列している人びとまで殺された。遊んでいる子どもたちが殺された。痛ましいことだ。

戦争はなくならないのだろうか。世界は戦争をすること、人びとが殺されることに慣れてしまった。ブラジルでワールドカップがおこなわれた時も、シリアでは戦争が続いていた。私はボスニアの人間だから、知らぬ顔をしていることはできない。ボスニアについていえば、われわれはみな頑固者だから、ボスニアが意地の力で生き残っていってほしいと思う。意地というのは、あまり良い相談相手ではないだろうが、時には助けになるものでもあると思う。

この本は、いつか来るかもしれない困難な時期にどのように生きるか、どのように生き残るかの知恵を与えてくれる。とくに今、世界がおかしくなり、人間たちが大声でわめき立てはじめ、どのような反応を示すか予想を立てられなくなってきている時代に、大切なことを思い出させてくれる。

（千田 善・訳）

ヤスミンコくんのこと――単なる懐古趣味ではなく

千田善

『ぼくたちは戦場で育った』(原題は Djetinjstvo u ratu =戦時下の子ども時代)はこれまで英語とドイツ語に翻訳され、各地で注目を集めている。編著者のヤスミンコ・ハリロビッチくんは単なる懐古趣味(ノスタルジア)の人ではなく、現代の戦争をふせぎ、やめさせることを考えている。

2013年には欧州議会から特別表彰を受けた。その際、ブリュッセルでのイベントでスピーチをしたヤスミンコくんは、自分のあいさつを次のようにしめくくった。

――最後に、12歳の少女の日記を紹介します。

「私はとても恐かったけれど、部屋の外に出ることはできないとわかっていた。部屋には全部で13人が、もう2週間も一緒に暮らしていた。とてもうるさかった。お父さんが部屋の外に出た。お父さんは家の外に出たところで、撃たれて倒れた。私は泣き出した。とても悲しかった。前には普通の暮らしをしていて、食べ物も十分あったのに、今では援助が必要だ。私にとって何もかもが変わってしまった」

みなさん、この日記は1990年代のものでも、サラエボのものでもありません。この少女の話は……現在のシリアで起きていることです。戦時下の子ども時代は、今も続いているのです。私はこの本の出版が、子どもたちのために世界をより良い、より平和なものにする責任を大人たちが感じるようになって、初めて成功したといえると考えています。ご静聴ありがとうございました。

ヤスミンコくんたちは2016年夏、この本をもとにした「戦時下の子ど

も時代」博物館をサラエボにオープンする予定だ。

この本に登場する、当時のさまざまな「証拠品」（人道援助物資の実物や、女の子が当時使っていたバレエシューズなど）も展示される予定。子どもと戦争に関する博物館として、アムステルダムの「アンネ・フランク・ハウス」などとも協力して、現在も戦災に苦しめられている世界中の子どもたちのために役に立ちたいと考えている。

次ページ写真：2012年4月6日に行なわれたサラエボ包囲戦の開戦20年式典では、市のメインストリートに戦争の犠牲者数と同じだけの数の赤い椅子が並べられた。式典の参加者は生きている人間だけでなく、死者もまた含まれているというメッセージがそこにある。この式典の実行委員会にはヤスミンコ・ハリロビッチ氏が代表を務めるNPOも参加していた。

サラエボ 1992-1995
ぼくたちは戦場で育った

ヤスミンコ・ハリロビッチ・編著
角田光代・訳　千田善・監修

発　行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定　価：2,100 円（本体）＋税
発売日：2015 年 10 月 26 日
ISBN：978-4-7976-7269-5 C0098

ウェブでのご予約・ご注文は こちらにどうぞ！